

『六百番誹諧発句合』の研究

——内藤家所蔵「稿本」の紹介をかねた若干の考察——

檀 上 正 孝

一 はじめに

『六百番誹諧発句合』（以下、『六百番句合』と略称する）は、内藤風虎の主催により、延宝五年七六に成った。書名を一見して明らかなように、歌合の精髓といわれる『六百番歌合』になぞらえて作られた句合（注1）である。

この句合を主催した内藤風虎は、奥州磐城平七万石の城主であり、風流を好む文学大名として著名な人物であったが、句合にはことに力をいれた。現在、書（巻）名の知られるものだけでも十種にちかく（注2）、句合史上では前後に例を見ない熱心さを示している。されば、作者六十人・一千二百句に及ぶ『六百番句合』を成すことも可能であったわけであろう。句合としては最も大部なものであり、かつ当代の主要な俳人を多く集めている点からも、重要な資料と考えてよい。しかしながら、『六百番句合』はこれまで、研究の対象としてほとんどとりあげられたことがない。

『六百番句合』の本文は、『俳諧文庫第十六篇『俳諧句合集』』に収め

られ、明治三十二年に刊行されている。われわれは、最も容易に、これを研究の手がかりとして用いることができる。しかし、やや注意して読んでいくと、印刷による誤字・脱字と考えられる箇所が、直ちにいくつか発見されるに違いないし、研究を進めるにつれて、より確かな本文を必要とするようになるであろう。筆者はかねてより、『稿本』にもとづき正しい本文の姿を確認したいという希望をもってしたが、このたび幸いにそれがかなえられたので、「稿本」の紹介をかねて、いくつかの問題点をとりまとめてみた。『六百番句合』の全体にわたる、きわめて大まかな考察である。

二 内藤家所蔵の「稿本」について

ここに「稿本」とよぶのは、内藤政道氏（風虎の後裔、内藤家十七代御当主・東京）が所蔵されているもので、『六百番句合』の、いわば原本である。

荻野清氏の「句合集解説」（注3）によると、松字文庫に写

本がある由であるが、筆者は未見。全四冊で「勝負付」を欠くその形態からすれば、俳諧文庫本に翻刻された本文は、松宇文庫の写本に拠ったものと推定される。俳諧文庫本の解題には底本を明記していないが、写本の所蔵者伊藤松宇氏と校訂者大野酒竹氏との交遊関係からしても、この推定はごく自然であろうと思われる。

大きさは、縦二六・八センチ、横一九・八センチ。美濃紙半折、袋とじの大本で、「句合」八冊に「勝負付」一冊が添えられている（『俳諧大辞典』や『俳諧人名辞典』に四冊とあるのは俳諧文庫本によるものか）。

黄土色の表紙。浅い縹色の絹糸（よりあわせ）でとじてあり、原装のまま、高雅な趣を伝えている。虫蝕みが、全体にわたってかなりひどい状態であるが、本文を読むには大して差支えない。

題簽は無く、表紙に直接、

六百番 俳諧 諸 発 句 合 第一 釋 任 口 判

のごとく書かれている。表紙の文字は、九冊とも同一人であるが、誰の筆になるものかは明らかでない。

全体の構成は、次のようになっている。

第一冊 春 一	作者名 四丁 本文 五六丁	一番から 八二番まで	判者 任 口
第二冊 春 二	本文 四九丁 跋をふくむ	八三番から 一五〇番まで	

第三冊 夏 一	本文 五二丁	一五一番から 二二六番まで	判者 季 吟
第四冊 夏 二	本文 五二丁 跋をふくむ	二二七番から 三〇〇番まで	
第五冊 秋 一	本文 五二丁	三〇一番から 三七五番まで	判者 維 舟
第六冊 秋 二	本文 五二丁	三七六番から 四五〇番まで	
第七冊 冬 一	本文 五九丁	四五一番から 五三六番まで	判者 季 吟
第八冊 冬 二	本文 四四丁 白紙 一一丁 勝負付 一一丁	五三七番から 六〇〇番まで	
第九冊 勝負付	白紙 一一丁 勝負付 一一丁	（冬二）に付載したのと同じものを別に書き加えて一冊とけは重複するわけである。	

各冊とも、第一丁表の右下の位置に、分銅形双辺に「散塵」とある蔵書印が押されて、本書がまさしく風虎の愛蔵した『六百番句合』そのものであることを示している。

本文は、句と判詞と作者名とがそれぞれ別筆で書かれていることを特記しておきたい。このことから、句合の作られた過程を、ある程度までうかがい知ることができるのである。

はじめに、句（組合せの番・左右の文字・季題もふくめる）を五行で書く。そのあとに、判詞を書き入れるために六行ぶんの余白をおいて、さらに次の番の句（五行）を書く。また余白（六行ぶん）をおく……。こうした書きかたで「稿本」のもとが作られる。ちなみに、一面は八行書きになっている。判定の公平を期するためか、句にはまだ作者名を記さない。墨色が濃く、文字も整っており、全巻をつうじて同一人らしいから、この部分は佐筆に書かせたものと考えておく（注4）。

次に、三人の判者が、各巻を分担して判詞を書く。六行ぶんの余白の部分に書き入れるのであるから、判詞が長文になれば、いきおい、細字でぎっしり詰めこまれるし、短評ならば六行を要せず、あとにお余白が残る。このような未整理のままの書式をとどめているところが「稿本」と呼ばれるゆえんである。

判詞は、三人の判者の自筆であるから、とうぜん、字体もことなっている。

任口は、佐筆の文字よりもやや小さめの文字で、ていねいに書きこんでいる。間違った箇所を訂正するにはみせけちを用い、また○印を付しつことばを補うなど、文章を推敲したあとをそのままにとどめている。

季吟の文字は、大きさも字体も佐筆のと殆んど変らないくらいで、一見ただけでは区別がつかないほど、整った書きぶりである。みせけちや補筆も少しはあるが、たいていは間違った箇所を刃物でこそけて消し、その上に書きあらためている。あたかも優等生の答案を見るような感じである。

維舟の文字は、やや大きめで、乱れている。くせのある字体で、墨色も薄い。訂正する部分を切りとって、別の紙を継ぎ貼りするなど、苦心のあとも見られる。

判詞を書き終つてから、さらに別筆で、それぞれの句の作者名を朱で書き添えている。だれの筆かは、はっきりとは分らない。全体を一度に書いたものではなさそうであつて、たとえば「夏一」を例にとつていうと、四〇丁（二〇九番）までは墨ずんだ朱をもつて楷書体で書かれており、四一丁以下の部分は鮮かな朱で、字体はくずれている、といったありさまである。

「勝」とか「持」とかの文字も、春・夏・冬の部は、朱で書き入れてある。そのうち、「春一」の二一丁（一六番）までは、墨で薄く記され、その上に朱で重ねて書かれている。おそらく、朱で書くべしと思ひ直して、ここですぐに改めたものであろう。同じ巻の二二丁以下が、ずっと朱で書き続けられているので、そのように考えられる。秋（維舟判）の部は、維舟の筆で、墨書きである。判詞を書くとき同時に「勝・持」の文字も書きこんだことが、その字体や墨色によつてわかる。

任口・季吟・維舟の三人の判者のうち、前二者は形式的な面についての統一がとれているのに対して、維舟はやや違った傾向を見せている。「勝」や「持」のほかに「吉持」の評語を用いたのも維舟だけある。彼はまた、巻の終りに跋文を書かず、署名もしていない。そのために、活字本で見ると、判者は任口と季吟だけとなる。これまで、「秋の部の判者は不明」（荻野清氏）とか、「任口・季吟らの判詞を加えて編集したもの」（伊藤大辞典）とか、「任口

・季吟の二人が判詞を加えたもの」(俳諧人名辞典)とか書かれて、維舟の名が抹殺される結果となったのは、そのためであろう。稿本「秋・二」の表紙および「勝負付」の末尾に、維舟判(あるいは、判者松江維舟)と明記されているのであるから、「稿本」を見ればこの疑問はただちに解消する。

「稿本」を翻刻するにあたっては、次のような点に留意し、注記することが望ましい。

一 春夏秋冬の部の切れ目をはっきりさせること。当然のことながら、俳諧文庫本ではそれが守られておらず、表題なしのベタ組みとなつているため、作品ぜんたいの構成が、あいまいで把握がたく、さきほどの「維舟判」が不明になつたりなどもする。

二 推敲されたあとの形だけを示すのでなく、みせけちのことばなども、あわせ掲げること。たとえば(春一、四五番)、
春手向には花そへてこそ手向をなし帰らまほしき事也

三 あとから補筆された部分は、はっきりそれとわかるように、區別して記すこと。たとえば(冬一、四八六番)、
左氷魚にまざる心なるべけれど鳥羽にはたてつくもなしともしきこえてよくいひかなへたりともきこへぬにや(傍点の部分は補筆)

四 「稿本」のふりがなは正確に付すこと。(俳諧文庫本では、ふりがなは除かれている。)たとえば、
河童(春一、三二番) 乾屎掬(春二、九四番)

五 「冬二」の巻末および別冊として付け加えられた「勝負付」(未翻刻のもの)を、あわせて収録すること。

六 そのほか、漢字と仮名の入れかえを正すなどの点は、とうぜん「稿本」にもとづいておこなわなければならない。

以上のごとき本文の姿を知ることによって、われわれは、「六百番句合」という作品を、かなり立体的に理解することができるであろう。

作品研究において、まず正しい本文を確認し、それを研究の基礎にしなければならぬことは言うまでもない。われわれが容易に手にしうる俳諧文庫本『六百番句合』に多くの誤字・脱字があることは、最初にのべたとおりであり、これが訂正は早急におこなわれなければならぬと考える。本文の異同についての詳細は、さらに別稿をもって報告したいと思う。

三 『六百番句合』の別本について

福井久藏氏は、その著書『諸大名の学術と文芸の研究』(注5)において、次のように述べておられる。

侯(注一風虎)は右大将家の六百番句合を撰ぶ。左は自家を始め水野虎竹・藤江野双・北村正立・松賀紫塵等より子息爵沾に至る三十人、右は田中曲言・松尾桃青等三十人の句をぬき四季戀雜に分ち、春の部は釋任口に、夏の部は季吟に、秋の部は松江維舟に、冬の部は季吟に、その他は自ら判者となりてその優劣をことわり。これは数多き句合中最も大きなもの、流石に大名の標度を思はしむ。この一巻は延岡の内藤子爵家に珍襲せらる。

ここで注目しなければならぬのは、いま筆者が付した傍点の部分の記述である。前節で紹介した「稿本」は、四季の句六百番をもって構成されたのであるが、福井氏の記述されたところによると、四季のほか恋・雜の部があり、それら恋・雜の部は風虎みずから

判詞を書いている、というのである。

では、福井氏の紹介されている『六百番句合』（これを今、かりに「別本」と呼んでおく）は、さきの「稿本」と、どのように違うのであろうか。もし、恋・雑をあわせて六百番になるのであるとすれば、全体の構成は、かなり違ったものとなることが想像される。

もちろん、恋・雑の部は新資料—その中には、桃青（芭蕉）の句もおそらく入っている筈である—として注目を浴びるのであろう。しかし、管見のかぎりにおいては、その内容にふれたものを、ほかに知らない。

杉浦正一郎氏の「^{以藤家}句合年表」（注6）には、次のように記されている。

東京内藤子爵家の稿本には、風虎判と云う追加の戀・雑の部はなく、之は未見。この一部、延岡の邸にある由である。

杉浦氏がかつて内藤家の稿本を調査されたとき、恋・雑の部はなかったということなのであるが、岡氏がここで「恋・雑の部」に言及されたのは、さきの福井氏の著書から得られた知識によっているのではないかとも思われる。「この一部延岡の邸にある由である」という表現は、誰から聞いたことばとも明確でないが、内藤家ではおそらくそのような回答は得られなかったであろう。

杉田作郎氏の『日向俳壇史』（注7）には、

明治四十三年宮崎で俳諧展覧会を開いた時、延岡の内藤子爵家から、同家に伝えられた俳諧に関する多くの書画、短冊等の外、六百番俳諧発句合全部八巻と、風虎の五百番自句合四巻とを出品せられた。

とあるから、明治四十三年以前において、「別本」はすでに内藤家

に存在しなかったことが考えられる。ちなみに筆者もこの「別本」の有無について内藤家でお尋ねしたが、現存の九冊以外には何もなしのことであった。「稿本」の表紙に貼ってある蔵書票（これは、いつごろ貼られたものか明らかでない）にも「共九之（一一九）」とあり、九冊が一揃いとなっている。延岡の邸（注8）には俳諧資料はまず残っていない、とのことも同家で確かめたので、延岡から出現する可能性は非常に小さい。福井氏・杉浦氏ともに世を去られた現在では、資料の存在を確かめるすべがないのである。なお、明治初期、あるいは戦時中、時勢のあわただしいころに、内藤家の蔵書類がいくつか巷間に流出したことがあるらしく（臼井信義氏談）、脂庫印の押しである書物が稀にわれわれの目にもふれることがあるから（注9）、『六百番句合』の「別本」も、今後どこかで発見されないとも限らない。

さてそうすると、「稿本」と「別本」との関係はどうなるか、という問題が残る。もし「別本」があったとすれば、それはおそらく、現存の「稿本」に、あとから恋・雑の部を追加したもの、と考えてよいのではあるまいか。つまり、「六百番・アラ・アルファ」というかたちである。そのように考えるのが最も自然であろう。福井氏が引用された『六百番句合』の作者の顔ぶれも、現存「稿本」のそれと抵触しない。現存「稿本」が初稿で「別本」が再稿ではないか、という考えもあり得ようが、「稿本」の整然とした組合せ（後述）をくずして再編成しなければならぬという理由は考えられないし、もし、やりなおすということになると、作者にも判者にもまた大きな負担がかかる。実際問題として不自然である。したがって、「稿本」と大いに相違する内容をもった「別本」を想定することは

むずかしい。出句者の一人でもある風虎が「恋・雑の部」の判者になったというのは、その部分が、興にまかせて追加された余興を意味するものではないか。いづれにせよ、この『六百番句合』の本体は、「稿本」のかたちと考えてよかろうと思う。

現存しない資料を相手にして、あえて憶測をたくましくし検討すれば、おおむね以上のようになる。

四 『六百番句合』の作者たち

六十人の作者（出句者）とその成績をあげると、次のとおりである。

左 右

風 虎	勝二八負〇持二 331◎	田中曲言	勝五負二持三
水野虎竹	勝八負一持二	水野林元	勝七負七持八 201
藤江野双	勝八負四持八	大坂三昌	勝四負九持七
北村正立	勝二負三持六 3	小沢家下	勝五負五持一〇 118
松賀紫羅	勝六負五持九 181	月松軒紀子	勝一負九持一〇 2
松村吟松	勝五負六持九 40	奥田方格	勝三負八持九 26
黒川行休	勝七負三持一〇	穂高久明	勝三負一〇持五 27
浅香研思	勝三負一〇持七 120	江口麗言	勝八負五持七 108
武野保俊	勝六負四持一〇 51	中井正成	勝三負一〇持七 70
望月千之	勝五負三持三 5	岡部朝徹子	勝七負三持一〇
高野幽山	勝九負五持六 74◎	日野好元	勝四負一〇持六 185
池田宗且	勝八負四持八 8◎	白江醉鶯	勝四負六持一〇
神野忠知	勝一負四持九 56◎	川路繁常	勝二負七持三 74
浜田春良	勝七負六持七 27	伊勢村重安	勝六負二持三 80

柏木万年子	勝四負六持一〇 92	岡部一欠	勝四負三持三 113
塩川如白	勝一負九持六 119	宮内友也	勝五負六持九 113
小西似春	勝九負五持六 60◎	樋口木子	勝五負七持八 9
広野元好	勝五負七持八 113	伊勢村意朝	勝七負三持一〇 4
望月千春	勝七負二持二〇	山口信章	勝四負六持一〇◎
録 沾	勝二負一〇持四 51◎	堺 幽明	勝三負七持一〇
延沢破扇子	勝八負四持八 33	高濑以仙	勝三負九持六 31◎
加藤治尚	勝五負七持八 12	沢 從古	勝四負七持九 13
前川由平	勝七負二持二〇	板花如流	勝二負三持三
長坂守常	勝四負七持九 152	生松勝政	勝三負八持九
青木春澄	勝一〇負二持八◎	岡西泰徳	勝五負七持八 5
矢吹露幽	勝四負五持二	松尾桃青	勝九負五持六◎
竹内松寸	勝七負四持九	常用由可	勝一負八持七 11
岩脇正藤	勝五負三持三 8	中堀初知	勝四負七持九 11
児玉久友	勝三負三持四 38	伊勢村有安	勝三負四持三
池西言水	勝四負九持六◎	吉田隆也	勝三負一〇持七 27

判者

沢 任口 78◎ 北村季吟 139◎ 松江維舟 206◎

一、成績の下に付したアラビア数字は「核川」入集句数。

二、〇印を付したのは『俳諧大辞典』に名の出ている作者、◎印は『俳諧大辞典・俳諧人名辞典』のどちらにも出ている

作者を示す。

次に、作者の顔ぶれを概観してみたい。左方の第一にいる風虎はくりかえし言うまでもないであろう。露沾はその第二子にあたる。

松賀紫塵・淺香研思・塩川如白・長坂守常・川路繁常らは、いずれも内藤家の臣であり、そのほか伝不明の作者の中にも、家臣にあたるものが多くあると思われる(注10)。水野虎竹は刈谷城主で、『三十六番句合』ほか数巻の句合が知られている。北村正立は、季吟の第二子。高野幽山および小西似春は、内藤家の文学サロンにおける中心人物であるし、山口信章はのちの紫堂である。池西言水は、延宝末年にいたって目ざましい活躍を示す作家で、『東日記』の撰者として著名。望月千之・望月千春・青木春澄らは、いずれも京都の俳人であるが江戸俳壇との交渉が深く、桃青(芭蕉)周辺の重要人物。のちに千春は『武藏曲』を撰し、春澄は『江戸十歌仙』から『俳諧七百五十韻』に及び、ともに蕉風の先導的役割を演ずることになる。月松軒紀子は、西鶴の『大矢数』に挑戦して『紀子大矢数』を刊行したので有名である。高澤以仙は益翁と号し、大坂俳壇の大御所的存在で『落花集』を撰した。宗因とは同年令、きわめて懇意な間柄でもあった。伊勢村重安も大坂俳壇に相当な地位を占め、『大坂独吟集』の巻軸に配されたほか、その名は諸書に散見する。伊勢村意朔・伊勢村有安は、いずれもこの重安と関係がありそうである。前川由平は宗因の高弟で、西鶴の先輩格にあたる。神野忠知は、世に「白炭の忠知」として喧伝され、池田宗旦は伊丹派の中心人物として活躍する。

このように見てくると、風虎のとりまきの俳人たちを中心としながら、京都・大坂俳壇の有名な作者たちをも集めて、なかなか多彩である。

前掲の作者一覧表でアラビア数字を付した作者は、風虎撰『桜川』(延宝二年成稿)に入集していることを示すのであるが、『六

百番句合』の判者三名・作者六十名のうち、判者三名・作者四十名(約三分の二)は『桜川』の入集者でもあり、両書に共通する作者群の密接さを思わせる。彼らの重要な創作の場が風虎の文学サロンであったことは、改めて指摘するまでもあるまい。

同じく、前掲の作者一覧表において○印を付したのは、『俳諧大辞典』や『俳諧人名辞典』に名の出ている俳人たちで、すなわち、かなり有名な作者たちということがいえる。これらの作者を中心に、他のマイナー・ホエットにも及ぶような、総合的な作者研究が進められるならば、『六百番句合』の特質もいっそう明らかになっていくことと考える。

五 『六百番句合』の組織について

『六百番句合』は、前記のように、六十人の作者が左右に分ち並べられている。では、その左右の別はどのようにして分けられているのであろうか。ごく大まかに言えば、住国別というまとまりを指摘することができる。前記『桜川』入集者の住国について調べてみると、京住の作者六名はすべて左に属し、大坂住の作者は七名のうち五名までが右に属している。また、風虎の領内である岩城住の作者は、十名のうち八名まで左に属し、岩城と並ぶ二本松住の作者は六名すべて右に属している。もっとも、江戸住の作者のように、三名は左に、二名は右に、という不明確なところもあり、所詮は、割りきること自体に無理があるのであるが、一般的傾向として大観するので、以上の指摘が十分に正確であるとは言いきれないが、結論的に言ってそれほど大きな相違はないものと思う。

次に、作者の配列順序の問題がある。配列順序にどのような配慮がなされているかは、よくわからないが、社会的あるいは俳諧的に名声のある人が相応の位置を占めることは、ごく自然なかたちとして考えられる。とくに重要なのは巻頭と巻軸であるが、各巻におけるそれらの位置は、次の人々に与えられている。

巻頭		巻軸	
春一 持風 虎	春二 北村 正立	夏一 持松村 吟松	夏二 持武野 保俊
一 田中 曲言	一五〇番 持江口 麿言	一五一番 日野 好元	三〇〇番 伊勢村意朔
秋一 持高野 幽山	秋二 持浜田 春良	三〇一番 高海 以仙	四五〇番 中畑 初知
冬一 持小西 似春	冬二 持露 沾	四五一番 大坂 三昌	六〇〇番 岡部朝徹子

右の十六人のうち、十三人までは『桜川』入集者であり、しかもその句数が比較的多いところから見ると、これらの作者は、風虎のサロンでかなり古からの重要な顔ぶれということが出来る。配列順序をきめるにあたって、そのような要因がある程度はたらいだであらうことが考えられよう。

なお、私見によれば、春・夏・秋・冬の巻々を各二冊に分けたのは、あくまで便宜的な取り扱いと考えられる（注11）ので、春一の巻軸と春二の巻頭（夏・秋・冬の巻についても同様）は重視しなく

てもよいと思う。

さて、こうして左右の作者が揃い、それにしたがって、（注12）に示すような規則正しい配列の順序で組合せが決められている。はさみこみの別表を参照すれば、なおいっそう具体的に理解できよう。この整然とした組み合わせは、他にあまり類例のないみごとなものであって『六百番句合』の大きな特色の一つといえることができる。

ただし、整然とした組み合わせ順序の中、一箇所だけ乱れているところがある。それは、四五〇番から四五一番にうつるあいだに見られるのであるが、そこに一巡のずれができて、四五一番以下は組み合わせが一番ずつずれている。このため、四五一番から四八〇番までのあいだの、予想される組合せ（注13）は存在しない。なぜこうした順序変更がなされたのか、また誰によってなされたのか、については、現在のところ不明というほかはない（注14）。

六 『六百番句合』の成立時期

この大規模な句合がいつごろから計画されたものかは、具体的に知ることができないが、判詞が書きあげられた年月日は次のように明らかである。

「春の部」の判者釈任口は、二丁にわたる長文の跋を付し、そのあとに「延宝丁巳霜月日」と日付けをいれている。これは、任口が判詞を書き終ったときを示すものである。「夏・冬の部」の判者北村季吟も、「延宝五年十二月三日」（夏の部）、「延宝五年閏十二月五日（冬の部）」と記している。（「秋の部」の判者松江維舟は、前述のとおり、跋文も署名も日付けも記していない）。季吟が「夏の部」の判詞を書きあげてから「冬の部」の判詞にとりかかったと

吉田聞也	伊勢村有安	中堀初知	常用由可	松尾桃青	岡西泰徳	生松勝政	板花如流	糸従古	高滝以仙	堺幽明	山口信章	伊勢村意朔	樋口木子	宮内友也	岡部一欠	伊勢村重安	川路繁常	白江醉鷲	日野好元	岡部朝徹子	中井正成	江口應言	穂高久明	奥田方格	月松野紀子	小沢衆下	大坂三昌	水野林元	田中曲言
30 言水	29 久友	28 正藤	27 松寸	26 露幽	25 春澄	24 守常	23 由平	22 治尚	21 破學	20 露沾	19 千春	18 元好	17 似春	16 如白	15 万屋	14 春良	13 忠知	12 宗且	11 幽山	10 千之	9 保俊	8 研思	7 行休	6 吟松	5 紫塵	4 正立	3 野双	2 虎竹	1 亂虎
58 久友	57 正藤	56 松寸	55 露幽	54 春澄	53 守常	52 由平	51 治尚	50 破學	49 露沾	48 千春	47 元好	46 似春	45 如白	44 万屋	43 春良	42 忠知	41 宗且	40 幽山	39 千之	38 保俊	37 研思	36 行休	35 吟松	34 紫塵	33 正立	32 野双	31 虎竹	30 亂虎	
86 正藤	85 松寸	84 露幽	83 春澄	82 守常	81 由平	80 治尚	79 破學	78 露沾	77 千春	76 元好	75 似春	74 如白	73 万屋	72 春良	71 忠知	70 宗且	69 幽山	68 千之	67 保俊	66 研思	65 行休	64 吟松	63 紫塵	62 正立	61 野双	60 虎竹	59 亂虎	58 言水	57 久友
114 松寸	113 露幽	112 春澄	111 守常	110 由平	109 治尚	108 破學	107 露沾	106 千春	105 元好	104 似春	103 如白	102 万屋	101 春良	100 忠知	99 宗且	98 幽山	97 千之	96 保俊	95 研思	94 行休	93 吟松	92 紫塵	91 正立	90 野双	89 虎竹	88 亂虎	87 言水	86 久友	85 正藤
142 露幽	141 春澄	140 守常	139 由平	138 治尚	137 破學	136 露沾	135 千春	134 元好	133 似春	132 如白	131 万屋	130 春良	129 忠知	128 宗且	127 幽山	126 千之	125 保俊	124 研思	123 行休	122 吟松	121 紫塵	120 正立	119 野双	118 虎竹	117 亂虎	116 言水	115 久友	114 正藤	113 松寸
170 春澄	169 守常	168 由平	167 治尚	166 破學	165 露沾	164 千春	163 元好	162 似春	161 如白	160 万屋	159 春良	158 忠知	157 宗且	156 幽山	155 千之	154 保俊	153 研思	152 行休	151 吟松	150 紫塵	149 正立	148 野双	147 虎竹	146 亂虎	145 言水	144 久友	143 正藤	142 松寸	141 露幽
198 守常	197 由平	196 治尚	195 破學	194 露沾	193 千春	192 元好	191 似春	190 如白	189 万屋	188 春良	187 忠知	186 宗且	185 幽山	184 千之	183 保俊	182 研思	181 行休	180 吟松	179 紫塵	178 正立	177 野双	176 虎竹	175 亂虎	174 言水	173 久友	172 正藤	171 松寸	170 露幽	169 春澄
226 由平	225 治尚	224 破學	223 露沾	222 千春	221 元好	220 似春	219 如白	218 万屋	217 春良	216 忠知	215 宗且	214 幽山	213 千之	212 保俊	211 研思	210 行休	209 吟松	208 紫塵	207 正立	206 野双	205 虎竹	204 亂虎	203 言水	202 久友	201 正藤	200 松寸	199 露幽	198 春澄	197 守常
254 治尚	253 破學	252 露沾	251 千春	250 元好	249 似春	248 如白	247 万屋	246 春良	245 忠知	244 宗且	243 幽山	242 千之	241 保俊	240 研思	239 行休	238 吟松	237 紫塵	236 正立	235 野双	234 虎竹	233 亂虎	232 言水	231 久友	230 正藤	229 松寸	228 露幽	227 春澄	226 守常	225 由平
282 破學	281 露沾	280 千春	279 元好	278 似春	277 如白	276 万屋	275 春良	274 忠知	273 宗且	272 幽山	271 千之	270 保俊	269 研思	268 行休	267 吟松	266 紫塵	265 正立	264 野双	263 虎竹	262 亂虎	261 言水	260 久友	259 正藤	258 松寸	257 露幽	256 春澄	255 守常	254 由平	253 治尚
310 露沾	309 千春	308 元好	307 似春	306 如白	305 万屋	304 春良	303 忠知	302 宗且	301 幽山	300 千之	299 保俊	298 研思	297 行休	296 吟松	295 紫塵	294 正立	293 野双	292 虎竹	291 亂虎	290 言水	289 久友	288 正藤	287 松寸	286 露幽	285 春澄	284 守常	283 由平	282 治尚	281 破學
338 千春	337 元好	336 似春	335 如白	334 万屋	333 春良	332 忠知	331 宗且	330 幽山	329 千之	328 保俊	327 研思	326 行休	325 吟松	324 紫塵	323 正立	322 野双	321 虎竹	320 亂虎	319 言水	318 久友	317 正藤	316 松寸	315 露幽	314 春澄	313 守常	312 由平	311 治尚	310 破學	309 露沾
366 元好	365 似春	364 如白	363 万屋	362 春良	361 忠知	360 宗且	359 幽山	358 千之	357 保俊	356 研思	355 行休	354 吟松	353 紫塵	352 正立	351 野双	350 虎竹	349 亂虎	348 言水	347 久友	346 正藤	345 松寸	344 露幽	343 春澄	342 守常	341 由平	340 治尚	339 破學	338 露沾	337 千春
394 似春	393 如白	392 万屋	391 春良	390 忠知	389 宗且	388 幽山	387 千之	386 保俊	385 研思	384 行休	383 吟松	382 紫塵	381 正立	380 野双	379 虎竹	378 亂虎	377 言水	376 久友	375 正藤	374 松寸	373 露幽	372 春澄	371 守常	370 由平	369 治尚	368 破學	367 露沾	366 千春	365 元好
422 如白	421 万屋	420 春良	419 忠知	418 宗且	417 幽山	416 千之	415 保俊	414 研思	413 行休	412 吟松	411 紫塵	410 正立	409 野双	408 虎竹	407 亂虎	406 言水	405 久友	404 正藤	403 松寸	402 露幽	401 春澄	400 守常	399 由平	398 治尚	397 破學	396 露沾	395 千春	394 元好	393 似春
478 春良	477 忠知	476 宗且	475 幽山	474 千之	473 保俊	472 研思	471 行休	470 吟松	469 紫塵	468 正立	467 野双	466 虎竹	465 亂虎	464 言水	463 久友	462 正藤	461 松寸	460 露幽	459 春澄	458 守常	457 由平	456 治尚	455 破學	454 露沾	453 千春	452 元好	451 似春	450 如白	449 万屋
506 忠知	505 宗且	504 幽山	503 千之	502 保俊	501 研思	500 行休	499 吟松	498 紫塵	497 正立	496 野双	495 虎竹	494 亂虎	493 言水	492 久友	491 正藤	490 松寸	489 露幽	488 春澄	487 守常	486 由平	485 治尚	484 破學	483 露沾	482 千春	481 元好	480 似春	479 如白	478 万屋	477 春良
534 宗且	533 幽山	532 千之	531 保俊	530 研思	529 行休	528 吟松	527 紫塵	526 正立	525 野双	524 虎竹	523 亂虎	522 言水	521 久友	520 正藤	519 松寸	518 露幽	517 春澄	516 守常	515 由平	514 治尚	513 破學	512 露沾	511 千春	510 元好	509 似春	508 如白	507 万屋	506 春良	505 忠知
562 幽山	561 千之	560 保俊	559 研思	558 行休	557 吟松	556 紫塵	555 正立	554 野双	553 虎竹	552 亂虎	551 言水	550 久友	549 正藤	548 松寸	547 露幽	546 春澄	545 守常	544 由平	543 治尚	542 破學	541 露沾	540 千春	539 元好	538 似春	537 如白	536 万屋	535 春良	534 忠知	533 宗且
590 千之	589 保俊	588 研思	587 行休	586 吟松	585 紫塵	584 正立	583 野双	582 虎竹	581 亂虎	580 言水	579 久友	578 正藤	577 松寸	576 露幽	575 春澄	574 守常	573 由平	572 治尚	571 破學	570 露沾	569 千春	568 元好	567 似春	566 如白	565 万屋	564 春良	563 忠知	562 宗且	561 幽山

すると、「冬の部」の判詞は約一箇月で書きあげられたと考えることができる。

しかし、この句合のそもそもの計画から、作者の人選・出句・組み合わせ・本文淨書（佑筆）・判定（判者）にいたるまでには、かなり長い期間を要したであろうことが、想像に難くない。ちなみに、同じく風虎の編になる発句集『桜川』は、寛文十二年正月三日という北村季吟の序と、延宝二^甲寅年五月仲旬という松山玖也の跋とをもつが、編集のために五年間ないし七年間を要したと考えられている（注15）。

六十人の作者たちは、春・夏・秋・冬の句を五句づつ、計二十句を出している。それらが各作者の自撰になったとすれば、作者の一人である神野忠知が亡くなった延宝四年十一月二十七日（注16）以前には、すでに出句していたと考えられる。あるいは、作者の自撰ではなくて誰かが選んだものと考えるならば、それでは誰が、どのような方法で選んだか、ということが問題になってくる。自撰か他撰かはともあれ、作者六十名という多数にのぼり、しかも地域的にかなり広範囲にわたっているから、まず作品を集めるだけでも容易なことではなかったと思われる。加えて三人の判者、いずれも当代一流の大家を揃えて豪華な出来ばえである。まことに、風虎という文学愛好の大名ならでは、かような大部な句合は成しえなかったことと思われる。風虎の執心ぶりも偲ばれて興味深い。

七 『六百番句合』と松尾桃青

『六百番句合』がこれまで研究者の注目をひいてきた大きな理由は、この句合の中に松尾桃青（芭蕉）の発句が収められているからであった。桃青の二十句のうち、十句は他書にまったく伝わってい

ない句であって、『六百番句合』により初めてその存在が知られるのである。これだけでも、本書の持つ意義は大きいといわなければならない。

しかし、それ以上になお注目しなければならぬ重要な問題は、桃青がこの句合の中でどのような位置を占め、どのような評価をうけているのか、ということである。延宝年間前半期の桃青の創作活動は、風虎の文学サロンと密接な関係をもっていると考えられるので、この問題についての追求は、今後さらに続けられなければならないと思う。

桃青は、右方^{かた}の二十六番目に配されており、これは常識的に考えて、あまり上等の待遇をうけたとは言えない位置である。事実、この時代の桃青（延宝五年・三十四歳）は、まだ作品も少なく、世間的にもほとんど知られていない人物である。ところが、勝負の成績を見ると、桃青は九勝五負六分であって、これは他にくらべてずいぶん良い成績といえるのであった。そのことは何を意味するのだろうか。

前掲の勝負一覧表で見ると、風虎の勝十八負〇持二と、露沾の勝十六負〇持四とは別格として、勝十以上をあげているのは正立と春澄の二人だけ。それに次いで、幽山・似春・桃青の三人が勝九である。とりわけ桃青の勝九は、右方における最多勝の成績であり、特筆に価するものであった。正立は、判者の一人である季吟の子息であるから、そのことが判定に有利な条件になっていたとすれば、好成績をあげたことも容易にうなずける。春澄・幽山・似春らが、のちにそれぞれの意味で桃青と競いつつ、新風撰索へと軌を一にして前進するのも興味深い。桃青を加えてこれら四名は、いずれも維舟

・季吟という貞門の俳系につながる点でも共通している。

といった、句合は多分に遊戯的な性格を持つものであるから、文芸至上主義では割り切れない面がある。勝ち負けを判定する際に、句をくらべるだけでなく、作者相互の人間的關係にも配慮して、両者をそれぞれ納得させる穏やかな判定を下すことが必要であろう。

風虎・露活父子の好成績よりは、判者のそうした配慮の、極端なあらわれと見ることができ。

とは言え、句の優劣が勝ち負けに直接かかわる重要さを有していたこと、もちろんであろう。句は、なにがしかの本質的なものを備えていなければならぬ。そして、句の優劣を正しく見わけるとは、判者の見識にかかわることである。その判定は、衆目にふれて、異論なく承認されるべき性格のものでなければならぬ。

このように考えてくると、句合の勝ち負けは、句そのものの優劣と作者の社会的俳壇的地位とに左右され、両者の程よいかねあいによって決まる、というべきであろう。

桃青が、大家・先進にまじって前述のごとき立派な成績をおさめたということは、すなわち桃青の力量が認められたということであり、先輩の幽山や似春に伍して、風虎の文学サロンの中心人物たるべき資格を与えられたことをも意味していたと考えられる。桃青は、ここで大きな光榮を得たわけであり、こういう地盤の上に、さらに大きな活躍（注17）が期待されるのも当然であった、と言えるのである。

かくして、風虎の文学サロンは、桃青の活躍舞台として重要な役割を演じたようであるが、風虎と桃青との交渉の有無は明らかでない。桃青の句が、風虎編『夜の錦』（寛文六）には入集していないが

ら、六年後の、同じく風虎編『桜川』に入集していないのは、いささか不自然に思われる（注18）。ともあれ、寛文年間には桃青まだ伊賀住であり、身分の相違から考えても、風虎との密接な交渉は想定しにくい。おそらくは、延宝三年の、西山宗因東下のころから接近していくのであろう。それにつけても、このグループの中心的存在であった幽山・似春らが、桃青とどのような關係にあったかを、もっとはっきりさせる必要がある。その意味で、風虎・幽山・似春の三人は今後ぜひとも再検討されなければならぬ俳人たちである。

八 おわりに

筆者が内藤家において「稿本」の調査をおこなったのは、昭和三十七年十月二十七・八日であったが、その際に、補修の必要を感じて進言したところ、御当主の内藤政道氏は特別の御理解を示され、ただちに東京大学史料編纂所において補修が施されるはこびとなった。同時に、マイクロフィルム撮影による複写もおこなわれ、史料編纂所に保管される筈である。この間の交渉には臼井信義氏が尽力された。

内藤家所蔵「稿本」の調査にあたっては、御当主内藤政道氏、同家総務野村雪氏の御配慮を添うした。また、東京大学史料編纂所の臼井信義氏、大東急記念文庫の三浅勇吉氏にもいろいろと便宜を与えていただいた。深く感謝する次第である。

この小論を成すにあたって、真下三郎教授・金子金治郎教授より有益な助言をいただいた。米谷巖氏には文献資料貸与の御好意にあらずかった。ともに記して感謝する。

この小論の記述には、別稿「芭蕉論序説―延宝期の「桃青」に

「関する考察」(『国語教育論考』第一号・昭和三八年七月予定)と重複する部分があることをおことわりしておく。

注1 「夏の部」季吟の跋に、次のようなことがある。

……風鈴軒尊公彼右大将家歌合にならへて都鄙の作者の句を番ひつつ六百番誦諸発句合せさせ給ひ(略)……(「風鈴軒」は、風虎の別号。『右大将家歌合』は『六百番歌合』の別名。

注2 岡田利兵衛氏「内藤風虎」(国語と国文学、昭和三二年四月号)および杉浦正一郎氏『芭蕉研究』(昭三三)三二三—三二六頁を参照。

注3 荻野清氏『俳諧研究』(昭九)一〇七頁。

注4 杉田作郎氏『日向俳壇史』(昭二九)三〇頁……本文は、佐筆に書かせて、それに判者が自筆で、丹念に一句一句批判を加えて、勝ち負けを書き(略)……によっておく。

注5 福井久藏氏『諸大名の学術と文芸の研究』(昭一二)五二二頁。

注6 杉浦正一郎氏『芭蕉研究』(前出)三二五頁。

注7 杉田作郎氏『日向俳壇史』(前出)三〇頁。

注8 内藤家は、元和八年二六から延享四年一七まで奥州磐城平を領し、延享四年に日向延岡へ転封となつて明治維新に至る。

注9 「源氏物語」(横大型六十冊合、美本)三〇冊 絵入、ひらかな、元正元校判本、万治三年林和泉椽板、引歌・目案・系図付内藤風虎旧藏版印」(沖森書店書目、昭和三七年七月号)。

注10 杉田作郎氏『日向俳壇史』(前出)三四頁には、小林乾一郎氏の調査として、内藤家の延岡転封のさいに随伴した家臣(の祖)十二名をあげている。いずれも『六百番句合』の作者であ

るが、再検討の余地はあろう。

注11 春・夏・秋・冬の部はおのおの一五〇番より成るが、それらの部を一と二とに分けたばあいには必ずしも等分されていないこと。また、「秋一」の巻末(三七五番)は判詞を書く余白が三行ぶんしかなく、「秋二」の巻頭に三行ぶんの余白があつて、両方あわせて、六行の余白となる。すなわち、「秋二」巻頭の余白は「秋一」巻末のつづきであり、ほんらい続くはずのものを便宜的に二冊に分けたものであることを示していると思われる。

注12・13 次頁に掲載。

注14 組み合わせ順序の改変については、いくつかの可能性が考えられるが、主張するに足る確実なよりどころはつかめない。筆者は、かつて幽山対桃青の組合せ回避の可能性について述べてみたが(拙稿「芭蕉論序説」)もとより一つの試論である。

注15 三浅勇吉氏『桜川』(昭三五)四二頁。

注16 高木蒼梧氏『俳諧人名辞典』(昭三五)六一頁。

注17 『六百番句合』が成つた翌年すなわち延宝六年に、桃青はきわめて積極的な活躍ぶりをみせている。米谷歳氏「延宝六年における三都の俳壇の動向」(広島県可部高等学校「研究紀要」創刊号・昭和三七年三月)、拙稿「芭蕉論序説」などを参照。

注18 坂坂元氏「詞林金玉集について」(遠歌俳諧研究、第五号)「夜の錦」複製(近世文芸、創刊号)を参照。

(昭和三七年一月一日・稿)

(広島大学大学院学生)

右

左

右

左

風水	野村	第 1 番	田中	曲林	言元
野江	村双	2	野坂	林三	元昌
水野	正立	3	大小	三衆	下子
北松	紫霞	4	野沢	紀方	格明
賀村	松林	5	田高	久慶	言成
川香	吟行	6	口井	正成	子元
野月	研保	7	岡部	朝好	驚常
望月	千俊	8	野江	好繁	重安
野田	之山	9	白路	醉重	友也
池野	宗且	10	川路	繁重	村友
神野	忠知	11	伊勢	重村	也子
浜木	春年	12	宮内	村	朔
方野	如似	13	口	信	章
小野	元好	14	伊勢	幽	明
望月	千春	15	高滝	以	仙
露	春沽	16	板	從	古
延	治尚	17	花	如	流
加	由平	18	松	勝	政
前	春澄	19	岡	泰	德
長	路幽	20	西	桃	青
青	寸藤	21	尾	由	可
矢	正友	22	用	初	知
竹	久言	23	堀	言	安
岩	水	24	伊	也	也
池	虎竹	25	勢	言	元
風	野双	26	村	元	
水	正立	27	田		
藤	紫霞	28	中		
北	松林	29	野		
松	吟行	30	水		

一巡

二巡

三巡

四巡

水野	虎竹	31	大坂	三昌
野江	双立	32	小沢	衆下
北松	正立	33	月松	子方
賀村	紫霞	34	田高	格明
松	吟行	35	口井	久慶
岩	正藤	57	伊勢	村
児	友水	58	吉田	田
池	言水	59	田中	野
風	虎	60	水	
藤	野双	61	月松	軒
江村	正立	62	田高	紀方
北松	紫霞	63	口井	久慶
松	吟行	64	中	正
黒	吟行	65	中	正
久	友	87	田中	曲林
言	水	88	野	言元
水	虎	89	水	元昌
野	虎竹	90	小沢	衆下

安也	伊勢	421	村田	有
言元	吉田	422	中野	曲林
言元	水野	423	水野	德青
言元	水野	424	水野	泰桃
言元	水野	424	水野	由初
德青	岡西	447	尾用	可知
可知	松常	448	常中	堀
堀	宗忠	449	常中	堀
堀	春良	450	常中	堀

言元	田中	451	坂	三昌
昌下	水野	452	沢	衆下
子方	大野	453	月松	子方
格明	小松	453	月松	格明
言成	松尾	474	常中	桃
子元	堀	475	堀	由初
驚常	伊勢	476	堀	安也
重安	吉田	477	堀	言元
友也	水野	478	堀	言元
朔	水野	479	堀	言元
章	水野	480	堀	言元
明	水野	480	堀	言元
仙	水野	480	堀	言元
古	水野	480	堀	言元
流	水野	480	堀	言元
政	水野	480	堀	言元
德	水野	480	堀	言元
青	水野	480	堀	言元
可	水野	480	堀	言元
知	水野	480	堀	言元
安	水野	480	堀	言元
也	水野	480	堀	言元

この組合せ存在せず

十六巡